

において能率を上げた。ハラシヨウ労働者として休日  
が少し多くあった。作業場やその往復は、監視兵が付き  
きりだった。

一日三回、エンバクのお粥とパン三〇〇グラムで  
あった。補食に山菜や茸を入れ、量を増し補った。

タイセット収容所からハバロフスクへ、いよいよダ  
モイだ。二カ月ほど建設作業、それよりナホトカに着  
く。船名は栄豊丸という貨物船で、船内は平穩であつ  
た。

昭和二十三年十月十八日、舞鶴に復員する。

帰国後、戦後社会の出遅れがあつて、営林署で森林  
作業と行商をやり、昭和三十年に現在の寿司屋の本業  
になる。

## 抑留記

長野県 立沢 三之介

伊那市小沢区に大正四（一九一五）年十一月二十八

日生。伊那町立実業補習学校を昭和七（一九三二）年  
三月卒業。自家にて農業を手伝い、母、兄、兄嫁、  
姉、私。

昭和十五年より東京に勤めに出る。

昭和十八年九月二十日、臨時召集により千葉戦車二  
連隊に応召になる。小銃兵隊、軽機隊、重機隊、大隊  
砲隊等である。

昭和二十年八月九日、ソ連軍が穆稜に侵攻、戦闘参  
加。八月十日、穆稜後退途中二回、戦闘する、犠牲者  
二十人くらい出る。

九月二十三日、鹿道にて武装解除。鹿道で詔勅を知  
る。連隊旗を焼却し連隊長服毒自殺、鹿道駅まで担架  
で来るがその後不明。

十一月十一日、牡丹江にて解散。各自が食料として  
トウモロコシを取り命をつなぐ。腹がすいて苦しかつ  
た。途中駅々で給水できたが、脱走者があり（七人く  
らい）、二日間給水ができず死ぬ思いであった。駅で  
蒙古人が鶏の丸焼きを売りに来た。

十一月十三日、愛河出発。十二月四日、タイセット

到着。

仕事は伐採、枝焼き等をする。入浴は週一回シャワーを浴びる。そのとき衣服を滅菌する。衣服は軍隊当時の防寒服を着せられて、大体それで作業に出た。

途中、入院して、退院後炊事勤務を二カ月する。その後は元の仕事の伐採に帰る。末口四五センチメートル、長さ五メートル五〇センチが一クーボ、それを二人で四クーボの割当作業です。割当一〇〇％できない場合は、普通三五〇グラムのパンを三〇〇グラムに減らされる。苦しい事ばかり、楽しい事は一つもなかった。

軽い営内作業もする。身体が三級になると二〇％の恩典があり一〇〇％に認めてもらえる。四級は営内作業、健康管理の事は思わなく、病気になるって入院したいと思った。

一日三回、骨のスープ。肉等は食わず、十日に一回くらい、ニシンの五センチくらいのを食べた程度。冬は草もないので松の木の皮を食べるか、ソ連人の捨てたジャガイモの皮を拾って食べた。また、ゴミ

捨て場から骨や野菜のくずを拾って来て、焼いたり煮たりして食べた。

週に一回、夏はゴロゴロしており、冬は午前一回、午後一回、薪取り日が寒くて大変だった。

うす暗く、二段ベッドなので、下がちょうどよければ上は熱い。夜寝る前に洗脳教育を受けた。眠くて困った。聞いていないと、「反動分子」で、帰りを遅らせるとおどかさされた。

零下五〇度もある日、夜間作業をさせられた。生きていればいつか帰れると思ひ、信念を持って過ごしていた。

### シベリア抑留を思う

長野県 桜井 義久

大正十四（一九二五）年八月三日、長野県上伊那郡富原村桜井に生まれる。

昭和十五（一九四〇）年三月、富原村立富原小学校